

会員・関係者 各位



國津比古命神社 境内入口  
(愛媛県松山市 13P 掲載)

特定非営利活動法人 KHJ 香川県オリーブの会  
連絡先 TEL・FAX 087-843-9877 (川井)  
ホームページ <http://khj-olive.com/>

暑中お見舞いもうしあげます  
月例会を下記の通り開催致しますので、ご案内申し上げます。

## 第86回月例会ご案内

1) 日 時 8月23日(日)

13:00～13:30 受付

13:30～13:40 理事長から報告・連絡

13:40～16:00 講演

「ひきこもりの家族と出会って思うこと」

香川大学教育学部准教授・臨床心理士 竹森 元彦氏

途中休憩あり

質疑応答

2) 場 所 香川県社会福祉総合センター 6階 研修室

TEL 087-835-3334 県庁の斜め向い

3) 参加費 1家族 1,000円

### 【今後の月例会】

9月27日(日) 香川県社会福祉総合センター 13:30～16:30

講演「ひきこもりと発達障害」

講師 香川県精神保健福祉センター所長 藤岡 邦子 氏

10月25日(日) 香川県社会福祉総合センター 13:30～16:30

臨床医師による社会不安障害についての講演(予定)

### 【居場所活動予定】

8月8日(土) 松田先生 個人カウンセリング (9:00～13:00)

8月8日(土) 運営委員会 (13:30～16:00)

8月29日(土) 松田先生 家族相談 (9:00～12:00)

8月1日(土)・29日(土) ポパイの会 (13:30～16:00)

### 【ポパイの会】

## 若者からの一言メール

『はじめて高知へ行きました。7月19日「やいろ鳥の会」の3周年フォーラムの講演会にも、たくさんの方が来られてびっくりしました。話の内容もとても良かったです。終わった後懇親会があり、高知の方とお話ができ楽しかったです。観光地へは雨が降り、坂本龍馬記念館しか行けなかったのが残念でした。またの機会に行きたいです。』 (Kさん)

『フォーラムの後半は、前高知県教育長の方のお話で、どんなお話かと思っていたら、当事者の子を持つ親(ある意味当事者)としてのお話でとても参考になりました。』 (Mさん)

“NPO 法人 グローバル・シッパス こうべ 森下さんのお力添えでパソコン教室がスタート”



パソコン教室(同封チラシ)の申込は、8月23日までをお願いします。

TEL/FAX 可(087-843-9877)又は例会時に申込書をお出しいただいても結構です。

息子さん、娘さんにお伝え願います。お手伝いのボランティアでもOKです。(不要のパソコンも受付けていますので、よろしく願います)



## 【前回(7/26)の例会より】

7月19日、KHJ高知県「やいろ鳥の会」(竹中あい会長)の設立3周年フォーラムが開かれ、オリーブの会からも数名参加しました。その内容を参加者から報告していただきました。(3~12ページに掲載)その時の講師のひとり 大崎氏による講演をオリーブの会の11月例会にお願いしています。(生き方の問題は何方にも関係した問題なので、ご家族でご参加いただければと思っています。)

例会後半は、参加者が父親1グループ、母親2グループに分かれ、話し合いをしました。

(12~13ページに掲載)

・全国引きこもりKHJ高知県支部「やいろ鳥」の会 設立3周年記念フォーラム から

第一部 演題「ひきこもり相談窓口の将来展望について」 (13:30~14:50)

山崎正雄氏(高知県立精神保健福祉センター長)

(初めに会長より挨拶があった。本年4月高知県立精神保健福祉センターにひきこもり相談窓口が開設された。厚生労働省の発表では全国47都道府県では開設されたのが10県で、この中に高知県が入ったと。)

とりあえず「やいろ鳥」の会3周年おめでとうございます。この3年間の「やいろ鳥」の会の活動に対して私達県立精神保健福祉センターが何をしてきたのかな、何も出来なかったという思いがあります。

高知県立精神保健福祉センターのこれまでの取り組みとこれからの展望をどうしたら良いのかなと思っているのが現状ですが、高知県のこれからの取り組みについて個人的に思っている事をお話したい。

国がひきこもり地域支援センターをしようとしているが、国は今まで何をしてきたか、今ようやくひきこもりかえという感想が正直な所である。

平成9年精神保健福祉センターに赴任した。初めて平成10年にひきこもり研修会を開いた。平成11年にも高知県にひきこもりが大勢いらっしゃるという事で研修会を開いた。統合失調症や躁うつ病等の精神疾患を持たない人の社会的ひきこもりについて、地域の中で声が聞こえてきた。医療の現場では聞こえて来ない。ひきこもっている人は医療現場に現れる事がほとんどない。保健婦さんと地域を回る中でひきこもる人の話を聞いた。10数年前はひきこもりはメジャーでなかった。統合失調症ではないかといわれて病気がどうか囑託医として訪問した。その中でたまに会える人が数人いた。非常に衝撃的であった。病気がどうかわからない、連れて行ければ楽、診てもらえたら楽、ひきこもりは受診が難しいのは昔も今も変わらない。部屋に入るときちゃんと整理整頓されてすごくきれいな部屋で閉じこもっている青年の方とか非常に散らかっている部屋にいる人もいた。1例のみ本人と話が出来た。部屋に入ってこの人は何なんだろうと思った。幻覚も妄想もない。しかし、コミュニケーションがとりにくい。家族とのコミュニケーションも取れる時と取れない時がある。暴力がある時もある。どうして外へ出て行けないのか？当時の自分の知識では分からなかった。対人恐怖の強い人だなという印象があった。じっくりと付き合いながらあまり刺激を与えないで優しく見守りましょうと言った。そのあとが続かない。5年、10年、15年経っても変わりません。どうしたらいいんでしょうと言われた。相変わらずとじこもっていると聞いて非常にショックを受けた。

その後も何回かひきこもりの研修会をしている。山梨県立精神保健福祉センター長の近藤先生にも来て頂いた。今年11月にも来て頂くことになっている。

ひきこもりの概念は変わってきた。病気であってもなくても対応を考えていかねばならない。無理やり引っ張り出すことは周りが考えている。しかし、一方引っ張り出してあげなくてはなかなか社会参加が出来ない。自分達の役割に線を引いている。ここから先はしませんよというようになっている様に思う。

ひきこもり地域支援センターをつかって一体何をやるのだろうかというのが自分の中にあった。保健、福祉、教育等協議会、連絡会をやってもどうなるか、本当の意味の連携、実際動いていかなければどうにもならない。

民間の医療機関、公的医療機関でもひきこもり支援は充分出来ていないと今も感じている。医療センターに精神科をつくる構想がある。これも10年前から思っていた。思春期・子供達の精神医療を出来る所はないか、責任を持って子供達の医療をする所はないかと色々考えたが頓挫した。

また、教育の問題がある。中学校までは良いけれど、高校になると大変。高校は行かなかつたら終わり。出席しなかつたら退学になる。お父さん、お母さんどうしますか。その前にどうしてこの子が学校へ行けないのかを考えない。医療機関で診て貰ってください。医療でバックアップする事が出来ない。自分達の限界を感じた。ひきこもり教室、家族教室もやったが続かない。2年位で消滅した。続けるのはすごいエネルギーがいる。竹中さん達が親のつどいを続けておられるのに敬意を表する。

今、センター内で場所を貸して家族サロンを併設している。山崎みつこさんという方がボランティアでしておられる。自分がかかわっていないが、廊下を通ると笑い声が聞こえる。楽しそうな雰囲気漂っている。山崎さんが醸し出す雰囲気が良いのか。ひきこもりだけでなく今生きている事に苦しみを感じている人が多い中、落ち着ける場所となっていると思う。

ひきこもりは精神疾患を背景に持っている人といない人がいる、最近では更に発達障害、人格障害、社会不安障害を背景に持っている人、対人恐怖など色々な人達がいる。その人達が共通に持っているものは何か、色々な疾患背景を持った人にそれぞれ専門的な関わりが出来、それを重ね合わせて

繋げていく所がひきこもり地域支援センターであればいいなと考えている。

当事者からこういう事をやって貰いたい、このようなものをつくって欲しいと声を聞かせて貰いたい。

KHJ 親の会とは初め何でこんな変なネーミングなのかと思ったが、今はちょっと違う。背景をきちんと表している、つかんでいると思う。

20~30年前はひきこもりは統合失調症が中心であった。10数年前より社会的ひきこもりがブームになった。その為統合失調症なのに社会的ひきこもりと見過ごされてきたことがある。今、ひきこもりが見直されて精神疾患のあるもの、発達障害のあるもの、その他の社会的ひきこもりに分けられてきた。これ等を、医療が必要かどうか見極めて医療機関へ繋げていくのが役割の一つであるがその先が見えない。この間の連絡会でもひきこもりの支援ということで医療の人にも入ってもらった。Doctorに繋げるのが難しい。本人が来なくても、医療が必要でなくても関わってくれるDoctorを掴むこと、又、若いDoctorをどう育てていくか必要な事である。ひきこもりは非常に時間がかかる。親の話のみ1時間聞く精神科医はいない。本人は来ない、親の話のみ、薬は出さない。これでは医療にならない。成り立たない。本当に支援を求めている人に支援が届かないのが現状。親の話を1時間聞く、これを精神保健福祉センターで定期的に続ける事は出来ない。建前は保健所や市町村へ繋ぐ。各地域支援センターで親の相談を受け続ける事が必要。ちょっと困った時に助言が受けられる場所が出来ればと思う。しかし、実際保健所・市町村で受けられるかという対人援助の人が減らされている。転勤・移動で人が変わる。相談を受け続ける事は難しい。医療機関へ繋げてはという形で終わってしまう。

ひきこもり地域支援センターをつくって見えてきたもの：ひきこもりの電話相談・面談・来庁される方が増えてきた。つくことは必要だなと感じている。今一度ひきこもりを考える組織・機関が出来た事は大きな意味があると思った。

色々愚痴で終わってはいけないという思いが出てきた。自分達で出来る事から動いてみようという思いになっている。

ひきこもり・ニート・発達障害がごっちゃになっている。何処にどう支点をもつか、どのように後押ししていけば良いのか、皆が繋がって支援していく。

ひきこもり地域支援センターの業務内容について

地域の第一次相談窓口 タライ回しにならないようにする事が大切。

医療が必要です 医療機関へ行ってください だめであつたら帰って来て貰う。相談し続け、繋ぎ続けていく。

連絡会議の開催：本音で話して貰う。多角的にひきこもりを考える。地域社会を変えていく視点も必要。

研修会の実施と情報発信：11月に研修会がある。それと地域でひきこもりに関わる人達への研修もしたいと思っている。

その他：家族等の居場所づくりの支援。



ひきこもりセンターは訪問すること OK。私も行きます。実際に訪問した話：本人には会えなかったけれど、家族と色々話した。後で役場の担当の保健師さんと話をした。誰かがこの苦しみを受け止めてあげなければいけない 人と人との繋がりをつくりあげていくのが私達の役割の一つだと思う

支援センターは単に中核となる機関であるだけでなく、支援を求めて地域の中で忘れ去られている人、生きづらさを抱えている人呼び起こし、発信し繋げていくことが大切、又本庁の方へもきちんと伝えていく事も役割と考えている。

14:30 終了

#### 質疑応答

Q：10年前のひきこもり研修会の第一期生の親です。親は元気に過ごしているが子供は10年前と変わっていない。移動なくして継続して相談に乗って欲しい。もし変わっても継続して相談出来るシステムがあれば良い。今、スタッフは何人いるか。

A：ひきこもり地域支援センター開設で非常勤の人を雇っている。常勤医 山崎先生一名・相談員 二名・保健師 三名・不定期精神科医 二名（2回/月）・心理 三名（一名/各週・二名/各月）。

Q：暴力（強制入院）について

A：暴力で傷つく、傷つけられる場合、強制入院させることはあるが繋がりがきれないように。暴力は本人が苦しんだ結果のものなので強制入院は関わっていく手段の一つとして通過点として考えてほしい。

Q：箱庭療法について

A：心の奥底を表現する検査法・治療法なのできっちりした熟練した専門家がする必要がある。かえって傷付けてしまうことがあるので。

Q：徳島の高橋です。ひきこもり地域支援センターは国の方ではコーディネイターをつくりいろんな相談の中で繋げていく又、連絡協議会をつくって役立つ機関に繋げていくと言っているが、具体的にどんな問題が多いか。今年重点的にどんな事をやっていこうとしているか。

A：コーディネイトすることが出来るようにしていく。繋いだ後も連携してやっていく事を目的にしている。協議会はまず課題を出して貰う。具体的にどう取り組んでいくかが次の問題である。

就労に繋いでもすぐ潰れて帰ってくる。背景に発達障害・社会不安がある 就労支援だけでなく医療支援を考える。失敗したらやり直す、まず課題を出す。



14:50 終了

以上

（文責：加藤）

## 第二部 演題「ひきこもりを巡る家族のあり方或いは人の繋がり方」（概要）（15:00～16:00）

大崎博澄氏（前高知県教育長）

去年の3月に退職、家庭の事情もあり、その後フルタイムの勤めに出ている。それも来年の春で終わるので、それから例会にも行かせて頂こうかなと思っている。

**ひきこもりの子をもつ当事者、つまり本人も親もひきこもりの場合は当事者だと思う。**その親として教育の仕事をして頂く中で、いろんなハンディキャップをもっているお子さん、不登校やいじめを受けているお子さん、保護者の皆さんの深刻なご相談をたくさん受けてきた。その中で**自分が学んだこと、自分自身の経験と自分が教育の仕事をするうえで経験してきたこと、この二つの中から自分が辿りついた、ひきこもりについての私の考え方を、お話をさせて頂こうと思う。**

これからひきこもりと付き合っていく上で、励ましになることが一つ二つあれば幸いです。

21世紀という時代は地球環境、かつてない空前の世界大恐慌というような経済不況が始まり、いろんな辛い残酷な事件が次々起こり、世相も非常に厳しい、そういう意味で**何もかも絶望的**といっている

ような時代を迎えているが、なればこそ私たちには希望があるのではないが、その希望は何処にあるかということをお話が出来ればいかなと思う。

我が家も子どもが大変で長男がいじめ、不登校、ひきこもり、家で暴れる、それをしっかり支えてくれた妹もそれが大きな心の傷になっていた。その傷が大人になってから出てきて大変である。家内も軽いうつ病でお医者さんから薬をもらっている。僕も余り辛くて眠れないときはこれをもらって飲むと、安らかになって眠れる。

## 1. ひきこもりをどう捉えるか。

皆さんも僕も長年辛い思いをしてきた。この辛さから何とか早く逃げ出したい、抜け出したいという思いをもっているのは同じです。ひきこもりは本当に悪いことなのか、或いはマイナスイメージをもって捉えてよいことなのだろうか。

**ひきこもりは悪いことではない。** 本人がそのために苦しんでいるのであれば、本当に辛いことでかわいそうなことだが、ひきこもりという現象は不条理な現代社会に対する人間としての極めてノーマルな反応と捉えることが出来る。医学的にも成り立ち得る仮説だと思っている。経済的な格差、派遣切りという問題にしても、不当な差別とか不当な格差を許している社会、20世紀は空前の経済的な繁栄を誇って来たその一方で、そういう格差を許している不条理な社会。競争競争に明け暮れる、生き馬の目を抜くような社会の中へ放り込まれて生きなければならない子ども達、青年達がそこから逃げ出したいくなる、ひきこもりたくなる。そういう状況を回避したいくなるのは当然の反応だと捉えることができるだろうと思う。だからひきこりは悪いことではない。マイナスイメージで捉えるものではない。新しい価値の発見、新しい創造のキッカケにも成り得る。多くの人が虚構の人生を生きていると思う。人生の本当の喜び、悲しみに触れ得ずに、何となく大学を卒業して、何となく就職して、何となく結婚して子育てをして、もし子どもさんが無事に不登校やひきこもりにならず結婚でもしてくれれば、それで終わってしまう人生ではないかと思う。それが浅い人生の終わり方ではないかと思う。

**ひきこもりは本人の責任ではない。** ひきこもりになりやすい資質というものはあるだろう、ということは想像に難くない。僕のように抗うつ剤を飲まなかったら人の前に出られないようなタイプ人間は最もひきこもりになりやすい。今の時代に生をうけていれば、多分学校へ行けなかったし、ひきこもっていただろうと思う。それは本人の責任ではないし、人格的欠点、人間性の欠点でもないと思う。ひきこもった息子も非常に生き方が不器用、だから徹底的にいじめられたり不登校になったり、ひきこもりになったりしやすいタイプ人間ですが、彼の人間性の欠点ではない。

**ひきこもりは親の責任でも家庭の責任でもない。** これはしばしば誤解をされる。僕も兄弟達からよく非難をされ、過保護に育て過ぎたと言われたが過保護の定義も難しいと思う。敢えて言えばひきこもりは親の育て方が原因ではない、ケースは千差万別である。だから家族、親が小さくなることはない。

**ひきこもりを治すという立場にたっちはいけないのではないか。** ひきこもりをどう捉えるかで一番大事なことであるが、これは大崎個人の見解で異議のある方もおられると思いますが、それは構わない。私はひきこもりを治すという立場には立たない。ひきこもりの本人の病気を治すとか家から出て行けるようにする、社会復帰が出来るようにするという考え方に立たないことが大事だと思う。山崎所長さんが今いみじくも僕が結論で言おうとしたことをおっしゃった。本人を治すのではなくて、ひきこもりというような社会現象を起こしている現代社会の不条理を直すという立場に私はたっている。ひきこもりを治すという立場にたたないでひき

こもりの問題を考えていく。ひきこもりをどう捉えるかという本質的な問題の僕の立場である。

## 2. 親としてどう向き合うか。

ひきこもりに関して不登校に関して最善の対応マニュアルは何処にもない、そういうことを思い定めておいたほうがいいかなと思う。千差万別、ケースも全部異なる、だからこうしたらいいという一律の判断基準はないと思う。昔日本の児童精神科医で最初に不登校問題に大きく深く関わってくれたワタナベ タカシ先生（最近お亡くなりになった）に直接教えを乞うたこともあり、相談にのって頂いたこともある大変僕の尊敬する医師である。高知へ来られ講演をしたとき、あるお母さんが「息子がテレビを壊しました。新しいのを買ってやるべきか、買わないでおくべきか」と質問をされた。それは当事者の親として切実な問題である。先生はどのようにお答えになるか、固唾を呑んで聞いていたらテレビのテの字も答えない、只ひたすら「子どもに寄り添いなさい」ということ、繰り返し繰り返し言われた。何故先生がこの切実なご質問に答えてあげないのかなと、その会場ではちょっと不満だった。後年何故答えなかったかと言う意味が分かった。正解は無いのです。テレビを買ってやるか、やらないかということは大した問題ではないということ、どちらでもいい。だから先生が「ひたすら寄り添いなさい。」というお答えをしたのだらうということが後々分かった。今もし私に同じ質問を受けたら、お母さんのお気持ちがどっち向きなのか、密かに探ってお気持ちのほうをプッシュしてあげたい、具体的な助言をしないことが大切だと思っている。先ほど強制的に病院へお子さんを入れるべきか否かというご質問がありましたが、テレビ以上に深刻な問題で僕もこのことでもの凄く迷いました。このことにもお答えしておこうと思います。どっちがよいという答えはないと思います。ケースによって違うだろうと思います。我が子の場合は親子の信頼関係が切れるというのをもの凄く恐れた。だからどんなに暴れても殴りかかれても耐えて偲んで病院に入れることは回避してきた。

あるとき大家さんに追い出される羽目になり、あんまり危険で、暴れるので、その時やむなく本人の意に反して入れました。連れて行くときは大人しく付いてきた。彼を置き去りにするとは思ってなかったのでしょう。でもその時は断腸の思いで心ならずも彼を病院へ置き去りにしてきました。

強制的に入院させました。これは長年親子の関係に傷になりました。だからどっちが正しいとも言えない。しかし時の経過によって親子の関係がかなり修復されていると思っているが、そのときの決断は辛い、答えにはなりませんがご参考までにお話をしました。

さて我が家のケースで親として反省していることは、一つは僕自身も弱い性格である、当時掛かっていた精神科医に「取っ組み合いでもするお父さんが命がけの対応をしないとイケない」と言われた。僕は虫もよう殺さないような弱い人間であの時もう少し踏み込んで取っ組み合いとまではいなくても、激しく言い合うぐらいの踏み込み方で、彼の悩み苦しみを受け止めることができたのではないかというのが、一つの悔いですね。もう一つの反省点は冒頭に申し上げました妹のことで、幼い妹が非常に健気に、いつも天真爛漫に全く平気な顔で私たち夫婦を支えてくれました。夜中に彼が暴れ始めると僕らは真っ青になっていたのですが、妹だけがいつも平然と装って来ていました。それに甘えて妹へのケアを私たちは抜かしてしまったと今大きな反省をしている二つ目の点です。だから、ご兄弟が一緒におられると特に下に弟さんとか妹さんとかいるときは、その年齢が思春期以下であるときは、ケアには心を配ってあげて欲しいと思います。その頃は相談機関がまったくなかったので、仕方なしに精神科医の門をあちこち叩きまくったのですが、残念ながらいい精神科医がいなかった。殆どいかなかった。何が一番頼りになったかということ、ピアカウンセリング 皆さんがやっておられること、親の会が一番頼りになった。そこで素人同士が集まって、いろんな愚痴を言い合う、慰めや励ましや、これがカウンセリングの手法として欧米では確立されている。

僕も同じ悩みを持つお父さんお母さんらと話し合っていることが一番支えになったと思います。

我が家のケースで、ひきこもりで得たものと失ったもの、これは皆様に少し励ましになるかと思うので少しお話しておこうと思う。子どもがひきこもって20年、地獄の20年と笑いながら言っていますが冗談ではないんですね。この20年で失ったものは何かというと、自分のために使う時間が先ず無いこと。今日もこの会が終わったら息子の所へ夕食を運ばないといけない。それから老後の蓄えはないです。退職金に匹敵する金額は既に借金で、子どもを旅行に連れ出すとか、漢方薬が効くといえばお金に糸目をつけなくていい、怪しげなお水も何十万円も買いました。でも全く効きませんでした。息子のひきこもり、娘の精神障害で得たもの、本当の友達が出来たということ、自分の子どもがいじめ、不登校、ひきこもり、家で暴れる、精神障害になるという最悪の経過を辿って僕にとって地獄でした。この地獄が深まるにつれて「大崎さんを真剣に助けたい」という人が自分の周りに自然にたくさん集まるようになって、自分を支えてくれるようになった。これが僕にとっては人生で一番大きな幸せですね。それから世の中で起きるいろんな問題、世渡りをしていく上での問題のなかで、どういう立場にたつか、全ての問題において社会的に弱い立場の人の側に自分は立ちきるという確信、その確信だけは揺るがなかった。

子どもの頃は死ぬのが怖かったが、死ぬ恐怖がいつの間にか無くなってしまった。現実の恐怖のほうを上回ると無くなってしまふ。なお、諦めの静かな境涯ではなくて、この不条理な社会を変えていかなければならない。これが自分の最終テーマだと思い続けている。つまり社会を変えるための戦いを自分なりにもう一度構築したい。というようなことを考えることができるようになった。自分が得たものと失ったものを比べてみると、断然得たもののほうが大きいかなと思う。

得たものと失ったものとどちらが人生にとって意義が深いか考えながら生きていくと人生の向こうに微かな希望がみえてくるというふうに思います。

### 3. 世の中とどう付き合っていくのか。

山崎先生もお話されましたが行政の認識というのが、まだまだ絶望的に低いレベルであり期待はできないだろう。世の中の認識というのがまた絶望的に低いと思わざるを得ない。世の中とか行政を恨んでこれと敵対をしていってもひきこもりの問題を解決するには、更に困難が増すだけではないか、解決の道に近づくことは出来ないのではないかと考えています。そういう意味で世の中とも行政ともうまく付き合いながら、敵を倒す戦いでなく、見方を増やすような戦い方をしていきたいと考えます。こちらが正直に困った状態を言いますと激励してくれる。仕事のことものいろんな配慮をしてくれる方が多かった。問題をあまり隠さずオープンにする、借りる力があれば遠慮なく借りていったら良いかなと思う。しかし自分でこの問題を背負い通していった、墓場まで持っていったという覚悟も必要だと思う。借りる力は遠慮なく借りれば良い、しかし密かに自分で背負いきるという覚悟もしておけば、人様を恨まなくてすむかなと思う。パーフェクトであることを他人にも自分にも求めないことがよいかなと思う。息子のことを申しますと彼をもうちょっと良い環境においてやるために、できることはいろいろある、僕としてどうしたらいいか、ベストを尽くすことで神様が許してくれるだろうというふうに思っている。パーフェクトでなくてもいいと自分に言い聞かせておくことも必要かなと思う。山崎先生のお話で教育の問題もたくさん出てきました。自分が責任者を長年やっていてこういうことを言われぬが非常に多くの問題がある。それは事実です。教育長を8年間やってきて辿りついた結論ですが、今の教育問題は家庭で解決することは出来ない、学校で解決することも出来ない、なぜか、子どもは社会の中で育っていくのです。だから社会全体が子どもが育っていくのによい状況にならない限り、家庭が逆立ちして頑張っても、学校が逆立ちして頑張っても教育問題を解決することは

できないと、子どもを育てるのは社会の責任だ、社会の中で子どもが育ってこそ、子どもは社会を支える人間になれると思う。今の若い人達はとんでもない反社会的な行動に走るのは育ててくれなかった社会に対する当然の反逆、当然の復讐だと僕は思っています。子どもを育てることができるような社会をつくらなければいけない。ひきこもり問題はひきこもり対策では出来ないということ。

根本的にひきこもり問題を解決するためには、

ひきこもりを生み出すような不条理な社会を変えていかなければならない視点が必要であると思っています。

最後に人生をどう生きるかというお話をしておこうと思います。 不条理な社会をどうやったら変えられるか難しい、昔からいろんな人がいろんなことを考えてきたが、なかなかうまくいかなかった。人生をどう生きるかということと社会を変えるにはどうしたらいいかということとミックスさせる、不当な格差や差別を容認する競争社会、こういう社会は間違っていると思う。しかし間違っている社会なればこそ私たちがそこで生きる、人生を生きるに値するものだと僕は考えようと思う。間違っている社会の流れに与しない生き方を選ぶことは、私たちに出来ることである。また目の前で困っている人がもし居たら、その人を助けるような小さな勇気、そういう勇気を持つ方向で一步踏み出していけば、その向こうに希望が少し見えてくるのではないかなと思います。

人生をどう生きるかということで、ずっと思い悩んでいることは、心の傷をどう癒すかということ、ある臨床心理士の専門家の先生が「心の傷を癒すことはできません」とおっしゃったことがある。「そうだろうなあ」と思う。自分の娘の心の傷をここ3年余り夫婦で七転八倒して頑張っていますが、どうしても癒すことができない。心の傷を持っていると、その心の傷は自分自身をやさしくしてくれる、傷を持っている人の気持ちが理解できる、そういう意味で人にやさしくなれる、そこが心の傷を癒す一つのキッカケではないかなと考える。自分の心の傷が自分をやさしくする、そうすると、人のやさしさに出会うことができる。やさしさに出会うことができるとこれは一つの成功体験である。かけがえのない喜び、そういう喜びの体験を積み重ねてゆくと自分で自分を認めることが出来るようになる。娘は自分で自分を認めることが出来ない状態のところまで足掻いている。

僕はそれを傍で見ながら思う。こういう経過をゆっくり辿りながら、自分の傷を覆っていくことができるのではないかと……。そういうふうにして娘の傷を癒していきたいなと思っています。

僕は2000年の4月に高知県の教育長になった。4月1日の僕の最初の仕事が、その年高知県の教員に採用された先生方に辞令をわたす辞令交付式だった。役所というのは変な習慣があり、偉い人が読む挨拶は全部部下の人が書いてくれる。これは奇妙な習慣だなあと違和感を持ちながら、上司の祝辞とか挨拶文を書きましたが、このときも挨拶を書いて下さっていた。可もなく不可もない通り一遍のおざなりの着任の挨拶でこれを読まないで角が立ちます。一応読みました。あんまり情けないなあとちょっと自分の言葉を添えました。

「皆さんは弱い立場にある子どもの見方になってください。」そういうことを言ったんですね。これが8年間守り通した僕の教育哲学です。大半は理解してくれなかった。孤独な戦いを続けた8年間でした。でも今考えてみるとこの哲学は、間違っていなかったかなと思う。証拠があるんですね。秘書をしていたお嬢さんが退職をされるときに、クッキーと一緒に小さなカードをくれました。ものをあまり言わないような大人しい方で、たまに声をかけるくらいの間柄でした。退職されるときのカードに「いつも朗らかな教育長を尊敬しています。小さな弱い人を守ってあげてください」と書いてあった。10ヵ月しかいなかった殆ど話したことがない若いお嬢さんが僕の哲学を理解してくれていたのが非常に嬉しかった。小さな弱い人を守る 例えば100頭の羊の群れを率いて一人の羊飼いが草原を旅している。1頭の子羊が道に迷ってしまった。さて群れ全体を守るために羊飼

いは群れに留まるべきか、それとも一頭の子羊が迷ってしまったらすぐ狼に食われてしまうだろう。1頭の子羊を探しに行くべきかという問題で、躊躇なく1頭の子羊を羊飼いは探しに行かなければならない。こういうところが教育哲学ですね。1頭の子羊を見殺しにするような羊飼いは99頭の群れを守ることはできない。1頭の子羊より99頭のほうが大事だという価値観を持つ人間には教育を語る資格はないと僕は思っている。これは結構しんどいことである。辞める直前に分かったことですが、僕にたくさんの励ましをくれました。一方で教育基本法を変えてはならないという非常に愚劣な真っ正直な馬鹿な答弁を僕は議会でしてしまったために、県議会は凄まじい大崎に対する批判の声は沸き起こり、なかなか大変でした。このあと数千の声なき声自分が自分を励ましてくれましたというふうに、1頭の逸れた子羊であっても幸せになることが出来るということ、私たちが信じているということ、希望の少ない時代の一つの希望かなと思います。ちょっとひきこもりの話から脱線してしまって申し訳ない。ひきこもりの問題は他人事ではない。我が子のことでもない。自分の人生を皆さんがどう心豊かに生きるかという問題である。僕の息子のひきこもりの問題は、僕の息子の問題ではなく、僕自身が自分の人生をどれだけ心豊かに生きるか。という問題というふうに思っています。自分の人生を心豊かに生きるにはどうしたらよいかということです。息子がひきこもって地獄の20年のなかであるものを得た。二つのことです。その一つ、小さなものを愛する好奇心、娘の介護をするために通う途中、どぶ川の上に架かっている橋がある、この川は汚い川だが生き物がいる。亀、鯉、特に感動するのは僕が通ると一斉に溯上してくる、ぼらの群れと出会えること、こういう喜びは息子がひきこもらなかったら知らなかった喜び、裁判所の前は段差がある、そこにタチツボスミレが5株ほど咲く、町のど真ん中で野生のスミレが咲く、僕だけが知っている。小さなものを愛する好奇心があると、人間が普通持っているよりも大きな勇気を持つことが出来る。二つ目は人の心の痛みに思いを寄せる想像力(イマジネーション)、自分の胸に24時間晴れない、鉛のようなズッシリと重いものがずっと20年ここにある。僕の息子を幸せにしてやれなかった、こんなやさしくて可愛いらしくていい子を不幸のどん底に落としたという悔いがある。鉛のような胸の痛みが出来てから、あることが起こった。それは自分とおなじような胸の底に大きな鉛の悲しみを抱えている人の気持ち、手に取るように分かりだした。そうすると僕の周りに本当の友達が現れるようになった。小さなものを愛する好奇心と人の心の痛みに思いを寄せる想像力があれば、人生にそんなに恐れるものはないかなと思う。また、どんな境遇におかれてもそれなりの幸せを、僕は今とても不幸です。長男に続いて娘まで病気になってしまった。治る見込みがない。お金も果てしなく要る。自分もお金を稼ぐ力もだんだんなくなってきた。状況は絶望的であるが、毎週金曜日近づくと誰かが「大崎さんを見に行こう」と言って誰かが電話をかけてきてくれる。あまり言われても僕も困るのです。お小遣いがあまりありません。だから非常に困るんですが嬉しい。本当の友達が現れて自分を支えてくれる。野原や山の草花や生き物が自分を励ましてくれる。このような人生が送れるというのは、息子のひきこもりがもたらしてくれた大きな幸福かなと思う。どんな境遇におかれても自分の不幸を幸福に変える力を私たちが持つ、そのチャンスは我が子のひきこもりである。そういうふうにしないといけない。そういうふうにしながら生きていけば、やがてお父さん、お母さんが心豊かに生きていればそれは必ずお子さんにも伝染します。それをじっと待たたらいいのです。それはすごく幸せなことだというふうに考えたいと思います。

以上

(文責：川井)

おとなになっていくあなたへ

おとなになっていくあなたへ  
これは私からの最後の手紙です  
今日からもう私はあなたを守ってあげられない  
今日からもう私はあなたを助けてあげられない  
まだ幼さの残る肩で  
あなたは人生をひとりで背負っていかねばならない  
そんなあなたへの、これは最後の手紙です

小さなものをいとおしんでください  
沖縄には小さ(くうさ)愛さ(かなさ) 小さなものはいとおしい、という  
古い言葉があるそうです  
なんと美しい言葉でしょう  
小さなものを愛する人生は楽しみに満ちている  
山歩きの途中であなたと探した、人差し指にも足りない草丈の  
チョウセンアヤメの小さな花を忘れないで

よい本を読んでください  
読み物は巷にあふれていますが、読む価値のあるものは少ない  
でも、心を開いていれば、必ず出会うことができます  
その人にしか語れないことが、誰にも分かるやさしい言葉で書いてある本  
それが読む価値のある本です  
よい本に出会うことは、よい友達に出会うこと

毎日、朝晩たどる道を、ゆっくりゆっくり歩いてください  
みんな急ぎ足であなたを追い越して行くでしょう  
でも、あわてない  
急ぎ足では、足元に咲いている小さなカタバミの花を見過ごします  
急ぎ足では、頬にあたるさわやかな三月の風を感じられない  
人生に急ぐべきことは何もない  
もし、あなたの人生に不幸が訪れたら  
それはもっと深い幸福に出会う機会が訪れたと思ってください  
もっと深い幸福とは、人の心の痛みを受け止める想像力を持つということ  
其のときあなたは、人生で初めて本当の友達に出会うことができる  
その友達があなたを支えてくれる  
不幸を背負うことで、あなたはもっと深い幸福に至る切符を手にすることができるのです

小林完吾さんがこんなことを言っていました

「子どもに生を与えたということは、  
親が付き合っただけでやれない死を与えたということ  
であれば、生きている一瞬一瞬が生きていてよかったと思えるものであって  
欲しい」

私は親として、あなたにそういう一瞬を与えられなかったかも知れない  
ごめんなさい

でも、人生は与えられるものでなく、自分の手で切り開くもの  
幸福は自分の創り出すもの

もう、私の手の届かないところへ旅立つあなたへの、これは最後のエールです

詩 2009. 7. 19 高知新聞掲載 大崎 博澄 作



チョウセンアヤメ



タチツボスミレ



カタバミの花

. 7月26日例会 父親のグループの話し合い から

(15:25 ~ 16:40)

- A 今回初参加。ポレポレ農園のビデオを見た。松田先生に初カウンセリングを受けた。息子25歳。3年くらい、ひきこもり。軽い「うつ」発症、治療中。県内のクリニックで安定剤、睡眠導入剤を利用。部屋からは出られる。バイト、職探し等は全くしない。本人は、やりたいことがある。東京へ行きたいと言う。
- B 子どもは33歳。何とかしようと会に参加した。これまでひきこもりなど思いもよらなかった。県外に住んでいた。祖父母の老齢で両親のみ香川へ引き上げた。息子と娘は県外に残っていた。就職難の時、学校卒業後、一度就職はしていた。小さい企業ではあるが、1年たっても正社員になれなかった。「会社の方針なのか、息子に能力がないのか？」と親は思った。6年前くらいから転職が次々と…。香川に連れ帰った。ハローワークにも通った。無事就職！

私の判断で「もっといい企業を」ということで辞職させた。それがきっかけか？職探しをしなくなった。外へも出なくなった。何もしなくなった。親の話もろくに聞いていない。家の農業の手伝いなどは素直にする。どうしたらよいか？

参加者から 本人のエネルギーが湧くまで待つのがいいようだ。第三者の力を借りるのが大事。家族だけでは解決できない。

- B 辞職させたことを親として今、反省している。親としては結婚できるような状態にしてやりたい。
- C Bさんがうらやましいくらい。結婚や、就職が目標というのは 実にはいい状況にある。第三者の仲介が必要というのは 親子関係のネジレがある場合であって Bさんの場合は 親子関係もうまくいっている。まだまだ軽症！何の問題もないように思える。しかし 第三者の意見を聞くのもいいかと思われる。我が家の場合は、暴力がひどかった。
- A 親の意見を押しつけないこと。親子関係のネジレを起こさないように。
- C 親の子に対する願いは、時がたつとだんだん低くなっていく。今なら まだまだ十分よくなる。
- A 「仕事の問題は趣味の問題だ」と斉藤環の本に書いてある。心身とも健康、元気であればよいと思うことが大事。
- C 本人がどう思っているか。何としたいと思っているかと知ることが大事。本人が一番苦しんでいる。
- D 私の息子は20年近くひきこもっている。長くひきこもっていると病気になる。強迫性神経症になった。3カ月に1回くらいは理髪等で外出する。
- C Bさんの場合 専門の先生に早めに相談すれば、早く解決できると思う。
- E 30歳男。7年間、徹底したひきこもり。外には出る。パチンコなど。家族とは顔を合わさない。親に対する申し訳ないという気持ちはある。親として大きな期待はしない。いらいらしない。過去に、暴力的な時があった。
- C カウンセラーの間にも 考え方の違い、対応の違いがいろいろある。
- A 今日の高知の報告会の話の中で 哲学的、究極的思考 大崎先生の話が印象に残った。

以上

8月22日(土)ポパイの会からタオル美術館見学(西条市朝倉)と昼食はお鮎予定、参加希望者は連絡ください。なお、自家用車の出せる方もお願いします。TEL(087-843-9877) 案内(本倉)



くしまひめのみことじんじゃ  
櫛玉比売命神社 拝殿



くにつひこのみことじんじゃ  
國津比古命神社 拝殿

国津古墳(円墳)と、櫛玉古墳(前方後円墳)の上に造営されている。応神天皇の時代に物部阿佐利が國造に任命され、彼の祖神をお祭しているのが國津比古命神社です。秋祭には石段の上から「みこし」を落とす「あばれみこし」で有名。

(愛媛県松山市 09.5月 若者H.Mさん撮影 デジカメ)